

「もちろんすべてを理解するのは無理なんです、
少しでもその子に近づきたいし、
いろんな近づき方ができるようになりたい」

——「未来へとつながるバトン」より

はじめに

山形県天童市立天童中部小学校を舞台に、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実について考える。これが、本書の基本的なモチーフです。特定の学校を「舞台」にするというこの意味をご理解いただくためにも、まずは本書の構成についてご説明しましょう。

第一章では、個別最適な学びと協働的な学びの実現という考え方を打ち出した、中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」について簡単に解説しました。

第二章では、天童中部小の取組に即して、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が一枚のカリキュラムの中で、たとえばどのように実現可能なかを、具体的な授業の景色や子どもの姿を通して検討します。そこから見えてきたのは、天童中部小が一貫して大切してきた、子どもと内容に関する深い「理解」と、教師の敷いたレールに乗せるのではなく、子どもたちの学びの文脈に沿って授業を展開する「覚悟」の重要性でした。

第三章から第七章では、この「理解」と「覚悟」を巡って、子どもが自立的に学び進める学習の基盤となる子ども観の問い直しと、実践創造の原理としての自己決定的学習、環境による教育、さらに新たな道具立てであるICTの可能性について、引き続き天童中部小の子

どもの事実^{じじつ}に依拠^{いこ}しつつ、さらに教育学や心理学の知見も参照しながら考えます。

最終の第八章では、今後に求められる教師の専門性について、天童中部小の研究に関わってきたベテラン教師三名の実践提案と討論、さらに天童中部小の若手教師たちへのインタビューを手がかりに検討しました。

このように、本書は一つの学校を「舞台」に書かれましたが、もちろん、そこでの議論は高い汎用性をもちます。具体的だからこそ活用が利く。本書のねらいはそこにあります。

天童市との出合いは二〇年ほど前、私が研究のお手伝いをしていた山形市立第四小学校の校長であった酒井順一先生がご勇退後、地元である天童市の教育長に就任され、同市の教育にも力を貸すようにとのご指示をいただいたのがきっかけです。その時の担当指導^{しんどう}主事が、現在の天童中部小学校の校長であり、研究をリードしてきた大谷敦司先生でした。

大谷先生と相談しながら、天童市立高嶺^{たかたね}小学校を皮切りに、市内の学校の活性化に微力を尽くしたのですが、その中で、当時一緒に実践研究を進めていた横浜市立大岡小学校の研究主任であった齊藤一弥先生（現・島根県立大学教授）にもお願いし、天童に何度となく足を運んでいただきました。齊藤先生は、そのご縁で今回の天童中部小の実践研究にも深く関わり、第八章でも実践提案をしてきています。もう一人、実践提案を寄せてくれた山形市立鈴川小学校教諭の佐藤卓生先生は、大谷先生の山形大学附属小学校時代の同僚であり、私にとっ

ても、さまざまな機会にともに研究に取り組んできた仲間の一人です。

また、本書には直接登場していませんが、東京学芸大学講師の佐野亮子先生には、個別最適な学びの単元構成や教材開発、学習環境整備について丁寧なご指導を賜りました。

さらに、本書の編集を担当した東洋館出版社の河合麻衣さんも三回にわたって天童を訪れ、子どもたちの学習を参観し、授業研究会に参加し、企画の立案や記録の作成に汗を流してくれました。まさに、本書は天童中部小を「舞台」として生まれたのです。

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を、単なる形態論や手法の水準でのみ理解し、実践するのは誤りであり、危険ですらあります。「子どもたちは、最終的には教師がいなくて現時点で教師が支援できることを行っている」と天童中部小では考えます。やはり最後は、子どもや授業をどのようにとらえ、教師は何をするのか、このことを深く考える必要があるのです。本書が、少しでもそのお役に立つことを祈念しています。

二〇二一年二月 奈須正裕

目次

はじめに

002

第1章

令和の日本型学校教育

成果を継承し未来を展望する

013

学習指導要領の着実な実施に向けての条件整備／「日本型学校教育」とその課題／個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

第2章

子どもが自立的に学び進める学習

自学・自習

025

子どもたちが進める授業／授業スクリプト／教師と子ども双方の周かな準備／エージェンシーを育む

マイプラン学習

039

単元まるごとを自分の計画で学び進める／学習のてびき／真の實力を引き出す

フリースタイルプロジェクト

062

すべてを子どもに返す学習／自分の世界を創り出し、広げていく学び

子どもが学び育つということ

078

第3章

近代学校の子ども観とその問い直し

近代学校の誕生

085

一斉指導は近代の発明品／雀の学校／モデルとしての軍隊と工場

批判と改革の動き

094

新教育運動の二つの原理／自由で民主的な教育を求めて／
手から手へと受け継がれてきたもの／子ども観の問い直し

第4章

すべての子どもは有能な学び手

子どもは学ぼうとしている

109

それは特殊な出来事なのか／自分に引きつけて学ぶ／学びを広げる教育的な機転／
今は何をやる時間なのか／その子ならではの学ぼうとしている姿

子どもは学ぶ力をもっている……………121

問題は教材の側にある／話が見えないという現象／情報開示と子どもの学ぶ力／子どもがつくるカリキュラム

子どもは一人ひとり違っている

一斉指導の何がどう問題なのか……………135

「まだ終わっていない人も鉛筆を置いて」／みんな違って、みんないい

一人ひとりの子どもの都合とタイミングで学ぶ……………141

何がよい学び方かは学習者によって異なる／学び方の得意と学ぶ領域の得意／「大造じいさんとカルガモ」／そこを起点に伸びていく

互恵的な学びの源泉としての多様性……………151

おつりの計算／四一人目の追求者／教科の学びが生き方の探究になる授業

個別最適な学びと協働的な学びのあるべき関係……………165

奈良の学習法／公開授業の不思議

自己決定的学習と環境による教育

自己決定的学習

より多くの決定を子どもに委ねる／順序選択学習／課題選択学習／課題設定学習

環境による教育

子どもの都合で自由に使える学習環境／幼児教育から学ぶこと

指示や説明を文字情報でまとめて提供する

ICTにより一変した学習材の収集と提供／体験・活動コーナーの設置

マルチに機能する掲示

ICTという新たな道具立てを得て

パソコンを文房具にする

作文の本質は文字を書くことではない／適材適所で上手に使う

授業支援クラウドの活用／カメラ機能を駆使する

情報伝達の授業はもういらない

内容を通して資質・能力を育てる／さらにその先の学びへ

時空を超えて連続する学び……………235
「モノ」から「コト」へ／授業と家庭学習の一体的な充実

第8章

教師の専門性を問い直す

自立的に学び進める子どもを前にして……………245

実践提案 お気に入り詩をさがそう！つくろう！……………248

実践提案 割合としてみる……………260

実践提案 単元で「公正」を考える……………272

解説 二つの実践提案から学びたいこと……………286

座談会 教師の専門性とは何か……………292

インタビュー 未来へとつながるバトン……………300



新学期。みんなと一緒に本気で遊ぶことでしか学べないことがたくさんあります

第1章

令和の 日本型学校教育

成果を継承し 未来を展望する

学習指導要領の着実な実施に向けての条件整備

本書のテーマである個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実は、中央教育審議会が二〇二一年一月二六日に公表した「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（「答申」）（以下「答申」と略）の中で提起したものです。

「答申」は冒頭において「社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となってきた中、子供たちの資質・能力を確実に育成する必要がある、そのためには、新学習指導要領の着実な実施が重要である」（二頁）としています。今回の「答申」は、二〇一七年版学習指導要領（平成二九・三〇・三二年改訂）とは異なる新たな方針の提起ではありません。

この点について、当時、教育課程課長として学習指導要領の改訂作業を指揮した合田哲雄氏は、「二〇一七年改訂をより効果的に実施するためには学校や教育行政のあり方の構造的な見直しが必要だと痛感しました。だからこそ二〇一九年四月に柴山前大臣に今回の議論に向けた諮問をいただくようお願いしたわけです」と説明しています。⁽¹⁾その上で、学習指導要領が目指す「学びの転換と働き方改革を両立させるためには、小学校高学年の教科担任制をはじめ教員配置や教員免許制度などを真正面から見直さなくてはなりません」と語っています。働き方改革については、二〇一九年一月二五日に中央教育審議会の答申（「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について（答申）」）が出ていますが、さらに学習指導要領の実施との関連において、さまざまな条件整備や道具立ての補強が不可欠だったのです。

加えて、学習指導要領の改訂作業の途上で、新たに浮上してきた課題もありました。その最大のもは「人工知能（AI）、ビッグデータ、Internet of Things（IoT）、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられたSociety5.0時代が到来しつつあり、社会の在り方そのものがこれまでとは『非連続』と言えるほど劇的に変わる状況が生じつつある」（「答申」三頁）ことでしょう。実際、小学校で必修化されたプログラミング学習も学習指導要領改訂の当初のメニューにはなく、途中から検討課題として入ってき

たものです。AIを「エーアイ」ではなく「アイ」と読むといった笑い話のようなことも、一〇年前ならごく普通に起きていたに違いありません。

この急激な状況の変化を受けてGIGAスクール構想が推進され、経済産業省は「学びの個別最適化」を含む「未来の教室」ビジョンを打ち出しました。さらに、STEAMやSDGsへの関心も、各方面でいよいよ高まりを見せています。学習指導要領の着実な実施に向けてこれらをどのように位置づけ、条件整備を進めていくかが課題となっていたのです。

「日本型学校教育」とその課題

「令和の日本型学校教育」という独特な表現は、従来からの「日本型学校教育」の成果や強みを確認するとともに、時代の要請に即した必要な改革を進めることで、これをブラッシュアップするという考え方から生まれました。

「日本型学校教育」の成果や強みについて「答申」は「学校が学習指導のみならず、生徒指導等の面でも主要な役割を担い、様々な場面を通じて、子供たちの状況を総合的に把握して教師が指導を行うことで、子供たちの知・徳・体を一体で育む『日本型学校教育』は、全ての子供たちに一定水準の教育を保障する平等性の面、全人教育という面などについて諸外国

から高く評価されている」（五頁）と述べています。また、「例えば、OECDによる我が国の教育政策レビューによれば、国際的に比較して、日本の児童生徒及び成人は、OECD各国の中でもトップクラスの成績であり、日本の教育が成功を収めている要素として、子供たちに対し、学校給食や課外活動などの広範囲にわたる全人的な教育を提供している点が指摘されている」（五―六頁）とも述べています。

たしかに、海外の教育関係者が日本の小学校を訪問した際に一番感心するのは、一年生の子どもたちが助け合いながら給食の配膳を整然と行っている場面だったりします。私たちが知らずれば、適切な指導の段階的な実施により十分に可能なことなのですが、彼らは「ワンダフル」「ミラクル」と評し、とても自分たちの国ではできそうにないというのです。

さらに、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う学校の長期休業を通して「学校は学習機会と学力を保障するという役割のみならず、全人的な発達・成長を保障する役割や、人と安全・安心につながるができる居場所・セーフティネットとして身体的、精神的な健康を保障するという福祉的な役割をも担っていることが再認識された。特に、全人格的な発達・成長の保障、居場所・セーフティネットとしての福祉的な役割は、日本型学校教育の強みであることに留意する必要がある」（七頁）と述べています。

このような成果や強みをもつ「日本型学校教育」ですが、社会構造の変化に伴い、数々の

課題の存在も明らかになってきました。

「答申」はまず、「我が国の教師は、子供たちの主体的な学びや、学級やグループの中の協働的な学びを展開することによって、自立した個人の育成に尽力してきた。その一方で、我が国の経済発展を支えるために、『みんなと同じことができる』『言われたことを言われたとおりにできる』上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、『正解（知識）の暗記』の比重が大きくなり、『自ら課題を見つけ、それを解決する力』を育成するため、他者と協働し、自ら考え抜く学びが十分なされていないのではないかという指摘もある」ことを挙げています（八頁）。

また、コロナショックに伴う「学校の臨時休業中、子供たちは、学校や教師からの指示・発信がないと、『何をして良いかわからず』学びを止めてしまうという実態が見られたことから、これまでの学校教育では、自立した学習者を十分育てられていなかったのではない」という指摘もある」（二三頁）としています。

さらに、先に述べた「情報化が加速度的に進むSociety5.0時代において求められる力の育成に関する課題」（二二頁）も指摘されていて、GIGAスクール構想により「令和時代における学校の『スタンダード』（一五頁）」として整備された一人一台端末や高速大容量のネットワーク環境の効果的な活用とその日常化が強く望まれてもいました。

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

このような現状を踏まえ、「答申」は一七一―一八頁において、個別最適な学びの拡充により「日本型学校教育」のブラッシュアップが可能であると訴えます。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大による臨時休業の長期化により、多様な子供一人一人が自立した学習者として学び続けていけるようになっていくか、という点が改めて焦点化されたところであり、これからの学校教育においては、子供がICTも活用しながら自ら学習を調整しながら学んでいくことができるよう、「個に応じた指導」を充実することが必要である。この「個に応じた指導」の在り方を、より具体的に示すと以下のとおりである。

全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現する

ことや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。

基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。

以上の「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。

ここで明快に述べられているとおり、「指導の個別化」と「学習の個性化」の二つからなる「個に応じた指導」を、学習者視点から整理したものが「個別最適な学び」にほかなりま

せん。

もう一方の協働的な学びについては、これに続く箇所（二八頁）で次のように言及されています。

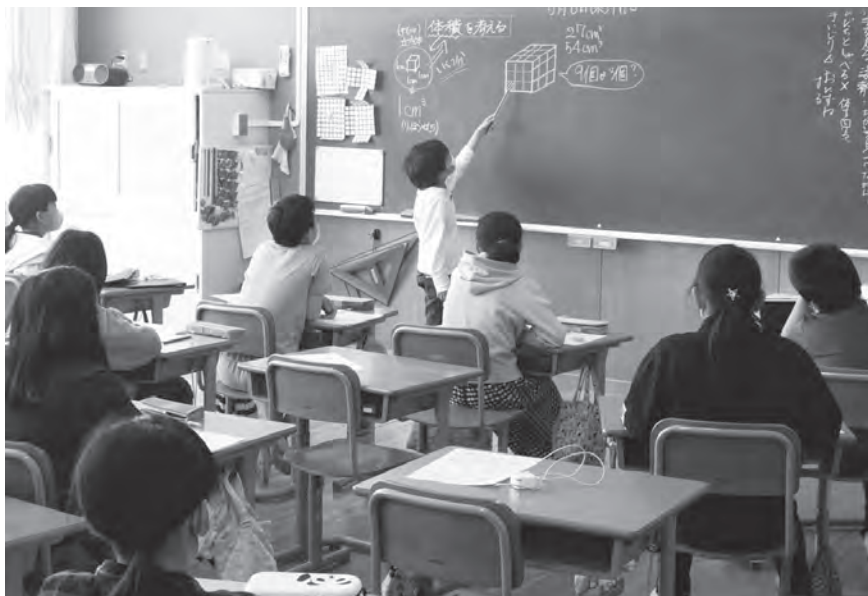
さらに、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた、探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。

「協働的な学び」においては、集団の中で個が埋没してしまうことがないよう、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげ、子供一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出していくようにすることが大切である。

そして、個別最適な学びと協働的な学びの関係性については「各学校においては、教科等の特質に応じ、地域・学校や児童生徒の実情を踏まえながら、授業の中で『個別最適な学び』の成果を『協働的な学び』に生かし、更にその成果を『個別最適な学び』に還元するなど、『個別最適な学び』と『協働的な学び』を一体的に充実にし、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要である」（一九頁）と整理し、これを受けて「目指すべき『令和の日本型学校教育』の姿を『全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現』とする」（二九頁）と結論づけているのです。

では、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実とは、一校のカリキュラムの中で、たとえばどのような姿として実現可能なのでしょうか。第二章では、山形県天童市立天童中部小学校の取組を例に考えてみたいと思います。

- (1) 合田哲雄・奈須正裕・住田昌治・森万喜子・妹尾昌俊「新春座談会 2021年、学校教育の論点」『教職研修』二〇二一年一月号、教育開発研究所、四頁。



ゴールデンウィーク明け。仲間の説明って伝わりやすい [自学・自習]

第2章

子どもが自立的に 学び進める学習